研究論文

東京第二師範学校男子部附属小学校の社会科単元指導計画作成における「文化活動」「自治活動」「復興活動」の役割

―― 1947年度指定文部省教科書局実験学校による社会科実施過程の一端 ――

篠　﨑　正　典※

The Role of "Cultural Activities," "Autonomous Activities," and "Rehabilitation Activities" in Developing and Implementing Social Studies Units at an Affiliated Elementary School of the Tokyo Second Normal School for Men: The Implementation Process of Social Studies in Experimental Schools in 1947 designated by the Textbook Bureau of the Ministry of Education

Masanori SHINOZAKI

1．はじめに

東京第二師範学校男子部附属小学校（以下，東京第二男子附小）は，文部省教科書局（以下，教科書局）から1946年12月に1947年度の実験学校に指定され，社会科の実践研究に取り組んだ。当時の東京第二男子附小は，「社会科の発足にさきがけて，勇姿を日本教育界にさっそうとあらわしたところ」[1]と評価され，社会科の実施過程において重要な役割を果たした。こうした中で，東京第二男子附小では，1947年３月までに社会科単元指導計画を完成させて５月に発表している。

この社会科単元指導計画の作成について，のちに東京第二男子附小は，次のように述懐している[2]。

「教科学習の整備と充実とに力めながら，クラブ活動の前身ともいうべき『文化活動』と生活再建の切実な要請に応えて勤労を担っての『復興活動』

※筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻（社会科教育）

とを創設してその両翼にそなえ，更に生活自治のねらいに立って『自治活動』を促し学校教育の組織に組み入れた。この三つの特別学習指導が自主と協同，個性化と社会化との調和の上に健実な生活気運を醸成し，やがて社会科の作業単元による学習の基礎を形成して，今日の我が校の教育計画にがっちりと筋金をいれてくれたわけである。」

ここから，東京第二男子附小では，文部省が編纂した『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下，『要領Ⅰ』）の情報に加え，「文化活動」「自治活動」「復興活動」という3活動を基盤に社会科を構想したことがうかがえる。このうち「文化活動」と「自治活動」は，4月以降は新教科「自由研究」に再編されるが，これらの教育経験は，同年11月までの社会科単元指導計画の修正作業でも大きな役割を果たしている[3]。

しかしながら，これまでに東京第二男子附小の社会科単元指導計画の作成について，3活動との関連から検討されることはなかった。それは，当時，『要領Ⅰ』の編纂委員である尾崎乕四郎による「作業単元のそれぞれが文部省案の問題のどれと関連しているかをしめしていることや，作業単元の数は多きをさけようとしている」[4]という点での評価や，文部省の石川二郎により，「文部省の社会科コースオブスタデイーの占める地位は極めて大きく，第二附属小学校が文部省研究指定校としての性格上にまず文部省案（「問題単元」）によったのはやむを得なかった」[5]（（　）は筆者）と言われ，『要領Ⅰ』の「問題単元」を具体化した社会科単元指導計画と伝えられてきたことが関係していると考えられる。また，国語教育史の立場から東京第二男子附小の1947～1949年度の教育実践を検討した本橋は，社会科単元指導計画の概要を紹介するにとどまっている[6]。特別活動史の立場から『小学生の自由研究』誌を検討した根津も，同誌への東京第二男子附小の教官の関わりから，同校が「自由研究」に力を入れていたことを指摘する[7]が，社会科との関係には言及していない。したがって，東京第二男子附小の社会科単元指導計画の特色を明らかにするためには，前述の3活動との関連から再考察する必要がある。なお，このことは，教科書局の実験学校である東京第二男子附属小による社会科単元指導計画作成の特質を明確にするという意味において，成立期社会科の実施過程[8]を解明するための重要な基礎的作業として位置付けられる。

以上から本稿では，東京第二男子附小が1947年5月に発表した社会科学習指導計画の作成過程を「文化活動」「自治活動」「復興活動」との関連から検討し，単

元構成の特質を明らかにすることを目的とする。そこで次の手続きをとる。まず，1945～47年５月の研究動向を整理し，社会科単元指導計画作成と「文化活動」「自治活動」「復興活動」との関わりを明らかにする。続いて，「自由研究」への再編を踏まえながら，「文化活動」「自治活動」「復興活動」の実態を明らかにする。その上で，社会科単元指導計画と「文化活動」「自治活動」「復興活動」との関連を検討し，単元構成の特質を明らかにしたい。

２．東京第二男子附小における社会科単元指導計画の作成状況

（１）終戦直後の東京第二男子附小の状況

終戦後の1945年秋，東京第二男子附小の教官と児童たちは，山形県の村々の寺の疎開地から，焦土の池袋に戻った[9]。疎開引き上げ後の東京第二男子附小の状況について，当時研究主任であった小山昌一教官は，次のように述懐している[10]。

「昭和二十一年の新年を迎え，そして二十一年度新入学児童を受け入れようとする頃になって，ようやく学校教育の復興，新しい教育の創造に立ち向おうという気力が燃え出した。○焼土となっている本校校舎焼跡の片づけ活動　○焼け残った附属小校舎の修復活動　○運動場の片づけ整地活動　○旧農場の整地と農作物の栽培活動　○みそ汁給食室の工作活動　○机・こしかけ・黒板等の修理作業

このような労働に当り，休けい時には焼石に坐りながら今日の授業をどうするか，新しい教育をどう進めるか論議しあった。」

そこで，東京第二男子附小では，「児童の心に灯をともす」[11]ために，土曜日を「復興活動」の日とし，掘り返された校庭の防空壕の整地や校舎内外の整備を開始した。この「復興活動」により校舎内外が整備されてくると，次は，「文化活動」という名でクラブ活動，「自治活動」という名で自治会活動を開始し，1946年12月６日の文化活動発表会と1947年３月17日の第１回公開研究会で報告している。

こうした活動の背景には，黒澤得男主事の指導があった。当時黒澤は，教育を立て直すために，教育者の自主性を重んじ，「教育の客観的普遍性を信じつゝ吾々は又教育が現実に即して建設」[12]することを主張した。黒澤の言う「客観的普遍性」とは，「現実の社会に存する教育的要求を科学的に調査研究」して得たデータを教育活動の科学的基準とし，子ども達が自己の生活や行動に最も役立つ知識と能力を獲得するように指導することである。具体的には，「既成の学問によって形

式的な教科課程を編成し，之によって教育する」のではなく，社会の要求と児童の実態調査の成果に基づき，子どもの活動を中心とする「常に生きた社会の中における生きた生活の指導」を重視することを意味した。

以上を踏まえ，東京第二男子附小は，1946年11月から井坂行男[13]による実態調査の指導を受け，新たな教科研究を開始した。その際，実験学校としての研究開始に先立ち，11月25～28日の教科書局主催調査指定校者講習会（於長野市教育会館）に参加し，児童の実態調査に基づく研究方法を摂取した[14]。その上で，東京第二男子附小は，12月から実験学校として，本格的に社会科の実践研究を開始したのである[15]。

（2）社会科単元指導計画作りの実施

東京第二男子附小の社会科実践研究は，1946年12月1日から開始され，1947年4月28日の授業公開を経て，5月に『新しい各科学習指導の研究』（学修会出版）と『新社会への子供―「社会」科教育の研究―』（牧書房）として発行された。この作業は，次の「本校教育の構想」に基づいて行われた[16]。

「イ，自学協同の教育理念と児童教育　ロ，自学協同の教育理念と現実の諸問題　ハ，自学協同の教育実践とその段階　第一段階　真実を求める研究活動の経過　第二段階　児童の実態調査に基づく学習指導　第三段階　自学・協同の学習指導と施設学習手引　其の他一般環境の整備・研究」

ここから，東京第二男子附小は，自学協同の理念のもとで児童の実態を踏まえた教育活動を目指したことが確認できる。そのため，「子どものありのままの姿を捉え，またそれによって変りつつある社会の動きを理解し，その子供の自由な成長と発達とを助けるところに学習指導と文化活動とを位置づけ」[17]た。

こうした中で行われた社会科単元指導計画の作成過程について，小山教官は次のように述べている[18]。

「1　約三ヶ月に亙って（一）にのべた前掲問題の研究協議をかさね，幾度か文部省其の他の方々の指導を受けて来た。2　本校児童の生活一般調査及び社会科指導と児童の心理的発達についての実態調査，更に父兄及び地域社会の様々な調査を進めた。3　こうした基礎の上に，学校経営方針と連関して社会科指導計画案を研究部員中心に立案して，全体会議にかけて一応の案を作成したのである。」（____は筆者）

ここから，東京第二男子附小の社会科単元指導計画作りが，文部省関係者等の研究者の指導と児童や地域社会の実態調査に基づいて行われたことが確認できる。前者については，『要領Ⅰ』編纂委員長の重松鷹泰と，井坂，初等教育研究協議会の関わりである。重松との関わりについて，のちに小山教官は，「文部省の重松鷹泰先生が『新しい教育の進め方について，手伝ってくれ―』とのおよびで，文部省の委員になった」[19]と述懐している。また，1947年３月19日には，３月24～27日の東京都教育局主催新教育研究協議会の小学校社会科パネルディスカッション登壇者による「作業単元」構成の検討会[20]に，黒澤主事が参加し，『要領Ⅰ』編纂者から指導を受けている。井坂との関わりについては，井坂が東京第二男子附小への指導について，次のように述べている[21]。

「私がかつて本校に奉職し（昭和十三年春―十五年春）附属の教官数名が私の教え子であること，本校に文化活動が，私のいた頃から―正確にはもっと前から―実施され，研究されていたのを知っていること，とりわけ，この研究に―特に調査について―教育研究を志す一人の学徒として協力した事実と責任とから私は免れようとは思わない。」

ここから，井坂は，豊島師範学校時代の教え子である小山教官らとの関係から指導者として招かれ，児童の実態調査に関わる指導を行ったことが確認できる。初等教育研究協議会との関わりとは，黒澤主事による協議会への参加を通したアメリカの教育情報の摂取である[22]。

このような中で作成された社会科単元指導計画について，黒澤主事は，「新教育運動の中で日本ではじめて，作られた教育課程」[23]と評価する。また，「当時まだ文部省では，学習指導要領も教科書も編纂途上にあったもので，その全貌は知る由もなかった」[24]中で作成されたため，両角教官は，「文部省でしめした単元選定基準（低学年，中学年，高学年），学年別指導目標，問題単元及び不十分ではあるが一応まとめた池袋を中心にした社会環境調査，児童の基礎的実態調査等の結果を総合検討してどうにか創り出した作業単元であり社会科学習指導計画であった」[25]と述べている。

しかし，東京第二男子附小は，社会科単元指導計画立案の際に『要領Ⅰ』に示された目標を十分に尊重していく以上に，次の８項目を重視したとする[26]。

「１　知性の高い独自自主の人格を養うこと。自己の尊さを知り，自分を大切にすること，そして自分の中に宿されている尊いものを，自己の努力

によってあくまでも発揮していくように。従って真実にあこがれ真理を追求してやまない態度を養っていこうとするものである。都市生活の複雑性と暗黒面。ゆうわくの多いことなどに対しても，こうした態度と能力を養うことによって対処させていこうとするものである。2　健康生活えのよい習慣を養い，強い体力を培わねばならない。通学の安全，危険の防止を始めとして都市生活児童の健康教育は特に之を強調していかねばならない。3　経済生活，特に都市の消費生活について理解させて，現下の経済危険に対処して子供ながらの生活技術，能力を養うこと。4　学校生活における自治組織，自治活動及び遊びの生活領域とか，家庭における子供の勤労活動，交友生活等は従来比較的未開拓のままになっていた。従って此の生活領域に着目して指導の具体化をはかろうとすること。5　校外施設（成美荘田園農場）とか地域社会の施設を十分に利用していく事。6　戦災をうけた学校の不備な施設を活かし復興への活動をうながしながら力強い実践力を養うこと。7　子供を尊重し，子供の自発活動を重んずることは申すまでもないが，同時に躾を重視し，正しい訓育を強調していくこと。8　先ず指導の可能な問題から実践にうつし，地味でよいから着実に教育をしていくこと。社会科指導が一種の流行に走り芝居がかったものになることを厳に慎しむ事。」（____は筆者）

ここから，社会科単元指導計画立案の際に「学校生活における自治組織，自治活動及び遊びの生活領域とか，家庭における子供の勤労活動，交友生活等」「校外施設（成美荘田園農場）とか地域社会の施設を十分に利用していく事」「戦災をうけた学校の不備な施設を活かし復興への活動をうながしながら力強い実践力を養うこと」を重視したことが確認できる。これらは，「文化活動」「自治活動」「復興活動」が重視した内容であり，社会科単元指導計画の作成において3活動が大きな役割を果たしたことを意味する。

では，実際に社会科単元指導計画作成において重視された「文化活動」「自治活動」「復興活動」の取り組みとはいかなるものであったか。そこで次に，この3活動の実態について明らかにしたい。

3.「文化活動」「自治活動」「復興活動」

(1)「文化活動」「自治活動」「復興活動」の実施状況

先述のように，疎開引き上げ後の東京第二男子附小では，学内整備のために「復興活動」を開始した。「復興活動」の指導記録は残されていないが，当時の教官の伊藤一郎が，次の回顧を残している[27]。

「土曜日を『復興活動』と称して，授業を止めてしまい，先生と子ども達が一体となって，校舎内外の整備に当たることを提案した。かかとのつぶれた古ぼけた靴をつっかけ，よごれた運動帽子をちょこんと頭にのせて，全くかまわぬ姿で皆の先頭に立ち，かいがいしく指導しておられた小山先生の姿が今も目に残っている。『六年生は植樹』『五年生は防空壕の穴埋め』『四年生は壁のよごれ落とし』と，さいはいを揮う姿は，りりしいというより，どこか，こっけいさがあって，職員を納得させるものがあった。」

ここから，「復興活動」は，小山教官を中心に，「植樹」「防空壕の穴埋め」「壁のよごれ落とし」等の学校内の整備活動を中心に行われたことが確認できる。

「復興活動」で学内が整備され，次に開始したのが「文化活動」である。「文化活動」は，「教科指導を根基とし教科内容を総合的且具体的に扱い，実生活に生かし以て児童の教養を向上せんとする児童中心の自立的な研究活動を目ざしたもの」[28]である。この活動は，個性伸張に束縛があった国民学校教育を反省し，豊島師範学校時代の経験[29]を振り返り，自立的な研究機関で児童の品性陶冶と文化向上を目指して開設された。「文化活動」は，次の4つの目標に基づいて実施された。1つ目は，「児童中心の活動の強化」である。「文化活動」では，教師は，教科指導のように児童に指導する立場ではなく，相談相手として児童の自由な研究意欲を引き出す役割を担った。2つ目は，「個性の伸張」である。「文化活動」では，国民学校期のように一定の人間像を規定して児童を育成するのではなく，児童の個々の素質と能力の伸張を目指した。3つ目は，「文化財をより児童の生活に結びついたものから取材する」ことである。「文化活動」では，教師がある条件から計画的に文化財を与える教科指導とは異なり，児童が主体的に文化財を取り上げながら教養の獲得を目指した。4つ目は，「社会性の伸張」である。「文化活動」では，同年齢の友からなる学級ではなく，同じ研究意欲，異性，異年齢の中で指導した。そのため，上級生の責任ある行動と研究を下級生が見習うことで，責任，協同，寛容等の社会性が伸びると考えられた。

以上を踏まえ，「文化活動」は，午後から二時間程度，各研究部（理工・文芸・書道・郷土・音楽・童劇・図画・手芸・運動・園芸・英語）で，自由に研究を行った[30]。1946年５月以降は，一，二年児童の未分化な状態と各文化部の運営とを考慮して総合文化部に，英語部は，英語科が準正課とされたことで一時廃止され，運動部，園芸部，郷土部も第四学年以上に設置された。各部の研究成果は，先述の1946年12月６日と1947年３月17日の研究会で報告されている[31]。

「自治活動」は，学校や学級生活の問題を自らの手で解決することで，児童たちに本当の生活力を身につけるために実施された。「自治活動」では，学校自治会により「全児童に関する自治活動の具体的な根本事項を決定する」[32]活動が行われた。学校自治会は，毎週一回，学校自治会に提出する議題の討議や学校自治会の決定事項を具体的に展開するための学級自治会を行い，そこでの決定事項を各組の学級委員３名が発言するというものであった。

しかしながら，1947年度から「復興活動」は勤労活動[33]，「文化活動」と「自治活動」は，新設の「自由研究」に吸収される。それは，「復興活動」は，校舎や校庭が整備され，教室清掃，美化，備品の整理保管，学校園や農園の作業等が必要になったことと，「文化活動」は，クラブ活動を主流として各教科との連携や研究活動的な学習の導入を目指してきたこと，「自治活動」は，児童の自治性伸長の問題を「文化活動」の中で自然に身に付くように模索してきたという背景があったためである[34]。

（２）「自由研究」の新設による「文化活動」「自治活動」の再編

「自由研究」は，「個性の伸張」「自主的な活動」「継続的な学習活動」「社会協同的活動」を目指して発足した。この「自由研究」の実施にあたり，東京第二男子附小は，次のように述べている[35]。

> 「今迄の文化活動には若干の修正（例えば社会科と殆ど一致する郷土班の発展的解消等，各文化班在否の問題）を施し，趣味に集まるクラブ活動として協力に成長せしめると共に，学級或は学年を主体として動く研究活動，学級自治会，学年自治会，学校自治会等を主体とする自治活動等のクラブ活動と併行して推進せしめる。」

ここから「自由研究」は，「文化活動」を「各教科学習の発展問題を総合的に学習する研究活動」（以下，「研究活動」）と「情操陶冶に大きな使命を持つ趣味に集

まるクラブ活動」（以下，「クラブ活動」）に，「自治活動」を「公民的訓練を目ざす自治活動」（以下，「自治活動」）と再編したことが確認できる。なお，「クラブ活動」は，総合文化部を廃止し，郷土部を新聞部，理工部を科学部，英語部を英会話部に改変し，科学・運動・美術・書道・文芸・童劇・手芸・園芸・音楽・新聞・英会話部を置いた。この背景には，東京第二男子附小が，教科の学習内容を発展させる機会として「自由研究」を重視したからである。

では，それぞれの活動はどのように取り組まれたのであろうか。まず，「自治活動」については，「学校教育に於いてばかりでなく，其の社会生活も家庭の生活も，総て自治的に営なまれ」[36]るものとした。そのため，「協調性のある自治」「平等観に立った自治」「企画性のある自治」「進歩ある自治」「責任ある自治」「反省ある自治」「素直な自治」を目指し，学校・社会・家庭に関わる内容で実施した。

次に，「研究活動」と「クラブ活動」は，【表１】の経営方針に基づいて行われた。【表１】から，次のことが確認できる。１つ目は，「クラブ活動」は，部の変更以外は，以前の「文化活動」を継承し，３年以上で毎週２時間程度，各部ごとに取り組んだことである。２つ目は，「研究活動」は，教科と連携して行われたことである。このことについて，東京第二男子附小は次のように述べている[37]。

「教科の学習指導が児童中心の考えを基盤として，児童の自発性を尊重し，学習素材を児童の中に求め，児童の心意の発達に添うた指導方法が考えられている。そして此の新しい教科の学習指導は更に発展して，学級学校等の枠まで外してきた。そして生きた実社会に直結し，あらゆる教科が入りからまって存在する社会の実体面から，総合的な生活に即した単元を取材した研究に至るべきものとなったのである。そうしてこそ児童をして将来の生活面に生ずるいろいろな問題を立派に解決し得る力を培養してやる事になるのである。

欺うした学習指導の発展こそ，課外指導の研究的なもゝ主流とならねばならないのである。欺く考える時課外指導としての従来の文化活動はその精神に於て合致するが，その組織の上に於て種々の不便を来すのである。」

そのため，学級や学年での協同の活動により，各教科の発展的な課題や児童が興味を持つ題材を中心に取り組まれた。具体的には，各教科の発展的な課題に対して，各自が生活の中から題材を見つけて自由に研究活動を行う①「各々が各個に自由な題目を捉えて研究する形のもの」と遠足や校外研究で扱う大きな課題を

【表１　研究活動とクラブ活動】

	主　眼	指導教官	児　童	班	時　間	題　材
研究活動	1，教科と連絡した研究活動であること	学級担任その他	1，学年単位 初三までは担任が参加誘導	随　時 研究題目毎に編成する	一週 3時間程度	1，教科学習に於ける発展した問題
	2，共同の活動が多い		2，学年の中で題材中心に集る			2，教科学習の発展とは別に児童が興味をもつ題材を選ぶことも可
クラブ活動	1，芸能そのものなどを追求するクラブとしての楽しい集いである	特にその道に長ずる教官	1，学級学年の枠なし	書道・音楽 図工・文芸 童劇・手芸 園芸・体育	一週２時限	文化活動に同じ
	2，個人の活動が多い		2，四年以上希望者 一・二・三年優秀者			
			3，一人一班に加入			

（東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）423頁より筆者作成）

クラスで分担して研究する②「一つの大きな問題（生活面から取り上げた具体的問題）を学級全体でそれを分担しながら研究する形のもの」の２つがあった。

以上を踏まえ，以下では，３学年以上を中心に，社会科単元指導計画の単元構成について明らかにする。具体的には，『要領Ｉ』の情報と実態調査が社会科単元指導計画の作成に果たした役割を検討した上で，「自由研究」の「研究活動」「自治活動」，「復興活動」との関連について検討したい。

４．社会科単元指導計画における単元構成の特質

（１）社会科単元指導計画のカリキュラム構成

先述のように，東京第二男子附小では，『要領Ｉ』の情報と，実態調査の結果から社会科単元指導計画を作成した。前者の『要領Ｉ』の情報とは，『要領Ｉ』の目標と「問題単元」である。東京第二男子附小では，社会科の目的を「人間生活・社会生活をよく理解して，更によりよい社会を創造し発展させようとする社会的な能力と態度とをを養う」[38]こととした。これは，『要領Ｉ』の「青少年に社会生活を理解させ，その進展に力を致す態度や能力を養成する」[39]という社会科の目的と重なるものであり，東京第二男子附小の社会科の目的が『要領Ｉ』に基づいて設定されたことを意味する。また，「作業単元」を「各問題（「問題単元」）の中特にどれかをねらったものでなければならない」（（　）は筆者）とし[40]，『要領Ｉ』の「問題単元」の具体化よりも「問題単元」との関連を重視して作成した。後者の実態調査の結果とは，先述の井坂の指導下で行った「児童生活」「児童の嫌うこと」「児童の遊び」「児童の勤労」「児童の読書」「児童心意」の調査結果[41]から，「心身の発達と生活の一般的特徴」「生活の内省と理想の追究（歴史的考察）」「生活交渉圏の拡充」をまとめた【表２】の「児童の生活様態」である。東京第二

男子附小が，こうした児童の実態を重視した背景には，井坂の教育観の影響がある。井坂は，新教育の中核に公民教育を据え，子どもが「現在営んでいる社会生活，生活活動」と「子供の関心と要求の発達，現在の生活の実態等，広く子供の発達」を踏まえて，「新しい社会をつくる基礎となる新しい人間性を陶冶」[42]することを重視した。「単に子供の実態が把えられるばかりでなく，同時にその背景をなしている社会の姿を把え得る」[43]という立場から【表２】に「生活交渉圏の拡充」を加えて児童の実態を整理している点は，井坂の影響と考えられる。

以上を踏まえて作成された単元表が【表３】である。【表３】から，『要領Ⅰ』の「問題単元」の具体化と見なせる単元は，３年の「28.」，６年の「16.」「18.」「20.」の４つのみであり[44]，３活動に関わる単元の多さに気づく。このことは，単元名を「３.」で述べた３活動と比較するとさらに明確になる。単元名を３活動と比較し，類似する単元を抽出したのが【表４】である。「研究活動」については，「３.」で述べた①として，３年の「2.」「11.」「15.」「16.」「21.」「24.」「31.」，４年の「7.」「10.」「11.」「13.」「18.」「19.」，５年の「1.」「6.」「7.」「17.」，６年の「9.」「11.」「12.」「19.」「25.」，②として，３年の「5.」「7.」，４年の「3.」「4.」「6.」，５年の「3.」「5.」，６年の「14.」等の遠足や校外学習にあたるものと４年の「3.」，６年の「3.」がある。「自治活動」については，３年の「1.」「4.」「25.」「30.」，４年の「1.」，５年の「10.」「14.」，６年の「1.」「2.」「10.」，「復興活動」には，３年の「3.」「18.」，６年の「15.」が重なる。

次に，これらの単元の特徴として，次のことが指摘できる。１つ目は，『要領Ⅰ』の「問題単元」や他教科との関連を重視していることである。「注意事項」をみると，「問題単元」の番号と他教科の名称が明記されている。２つ目は，「学習活動の要項」に「研究活動」と「自治活動」，「復興活動」の考えが反映されていることである。まず，「自治活動」と関連する単元では，次の特徴がみられる。１つは，３年の「1.」と４年の「1.」では学級自治会，６年の「1.」では学校自治会というように，学年上昇による発展である。もう１つは，４年の「1.」の「学習活動の要項」の「7，家庭生活の計画」にみられる家庭でのことを踏まえて学習活動を組んでいること，５年の「10.」や６年の「10.」等のように，学校行事の中での自治の重視である。次に，「研究活動」と関連する単元では，次の特徴がみられる。１つは，①「各々が各個に自由な題目を捉えて研究する形のもの」にみられる夏休みに個人で自由研究を行い，２学期はじめの発表会で交流することであ

【表２　児童の生活容態】

	心意の発達と生活の一般的特徴	生活の内省と理想の追究 （歴史的考察）	生活交渉圏の拡充
中学年／三・四年児	1.自己の内的力を急に外に向って発現し拡充していこうとする。従って他の人，他の物によく対立して競いを生じたり，破壊したりする。その為に生活が一般にやんちゃになり，落ちつきを失い統一をかいてくる。	1.他人との対立関係，自然界などとの交渉によって，自己を知るようになり，従って反省するようにもなる。	1.自分の家と学校とを拠点として急に生活領域を拡充していく。電車にのって遠くの方に出向いたり自転車にのってどこまでもいってしまって夜になってももどらないで親や教師に心配をかけるのも此の頃の子供に多い。
	2.衣服・持物なども乱れてくる。言語・動作も粗暴となり放らつとなる。	2.生活経験の反省から，自分とからまる問題について深くほり下げるようになり，同時に将来への理想を追究するようになり始める。	2.拡充した生活領域といっても，それは未だ点と線とであって其の間を深く充実し関係づけているとはいえない。
	3.知的能力（比較・弁別・判断・記憶等）が相当発達してくる。理科，工作等の学習に特に興味をもつようになる。	3.共同社会から認められることによって，自信をもち，又常にそうなろうとするところに理想があるようだ。	3.家庭生活では， 庭のそうじ，部屋のそうじ，おつかい，家庭園作業，ふろたき，まきわり其の他の作業をするようになり生活の質的方面を拡充してくる。
	4.求知心がつよく様々な物をよく集める。然しそれを深くみたり考えたり，整理したりすることは未だうまく出来ない。	4.発明とか，発見とかに興味をもち，科学とか宗教とかへの素朴な関心をもつようになる。	
	5.主観が強くなって来て，理くつをこねまわしてくる。物事の善悪すききらいも自己中心的である。	5.盛んに事物の起源を知りたがり四年になると歴史的事実も求めてくる。特に科学的な疑問とか，衣食住についてのものが多い。	学校生活 教室，運動場，学級園，標本室，小使室，読書室，理科室等前同様に質的な方面が発展される。
	6.闘争的となり運動競技を好む。英雄崇拝的となり，グループをつくって集団行動をする。リーダーは肉体的な者が中心となり易	6.太古より現在に至る長い歴史的経過を一括して昔としてしか考えない。	近隣社会生活 お友達の家（かなり多い），はらっぱ，哲学室，豊島園，荒川堤，植物園，動物園，石神井川千川堤，工場，建築場，駅の近く，車庫，運動具屋．電車，自動車の修理場などに
	7.従って気の弱い子，体力の劣る子どもなどは相当影響される。	7.人物，特に英雄譚を好む。	
	8.冒険，スリルなどを好む。	8.自分の生いたちを過去にさかのぼって考え	
	9.読書の傾向も此の時期に大きな変化をする。そして乱読が多い。	9.従って日記，学級日誌などによって，自己の歩みを残そうとする様になる。	
	10.男女の性別も相当はっきりしてくる。	10.祖父母，伯父母，従兄弟などの世代関係もつかめる。	
	11.よく人と対立したり，自然現象などと交渉する事によってそれが契機となって次第に自分を意識し認識するようになる。		
	12.以上の傾向も四年の後半になると余程趣を異にし五年の傾向をおびてくる。		
	13.其の他，自治心も出て来て自治的生活をするようになる。		
高学年／五・六年児	1.全身に兄さん，姉さんらしくなり殆ど大人の思考，感情，行動の様式に似てくる。	1.内省的になってくる。将来への理想ももつようになる。	1.三，四年当時，急に拡充した生活領域を有機的に関連づけ意味づけるようになる。
	2.求知心も一層つよくなって，理論的となる。発明発見とか，機械器具等文明の利器に関心と興味とをもつ。	2.自分の家とか，郷土とか歴史をたずねたり，物事の原因をほり下げたり，又広く日本とか世界の様子にも眼を開くようになる。	2.図書館，映画館，博物館などに深い関心をもち，自ら出向いていくようになる。
	3.自ら生活を内省し，自治，自立の生活が出来るようになる。	3.物の起源から現在に至る発展を追い之を歴史的に把握しようとする。	3.家庭における生活も内容的に深まって おそうじ，庭園の手入れ，おつかい，まきわり，配給物とり，炊事，訪問者の取つぎ接待，物の製作，器具の手入れなどをするようになる。
	4.夫々個々の特徴をあらわす様になり，又各自は自分の特徴に自負心をもつようになる。そしてお互いに此の特徴を認めあって親しく結ばれるようになる。従って，相互依存の関係とか，理解なども深まって来て交友生活も	4.単なる事物に止らず，社会機構・思想の発展などにも触れ始める。	学校生活に於いても同様にて 下学年の世話，週番，係などになって学校の運営に協力出来るようになる。
	5.グループ活動も自主的に運営され，其のリーダーは体力型から知力型に，更に六年になると人格型へと変る傾向も見られる。	5.個々の歴史事実を総合把握して考え，比較とか原因結果の推理も出来るようになる。	近隣の社会生活（よく出かける所） 近所の子供の世話，隣組の仕事，公益についての事，工場，映画館，小仏峠，天覧山，正丸峠，井の頭公園，豊島園，玉川園，六義園，日光，鎌倉，上野美術館，電気奨励館，鉄道博物館，中央気象台，水道タンク，淀橋浄水場，上野図書館，ポルトガル，ハンガリー公使館，千葉海岸，荒川堤などがあげられる。
	6.自己の主観も強いが，次第に客観的に物事を判断するようになる。	6.自分を過去と将来との相関する中間的存在として意識してくる。	
	7.生活経験が未だ浅いので自ら純理論で事をきめ易い。従って自治会などでは出来ないことまで協議決定するが，実行が伴わず，いろいろと問題を複雑にしていく。	7.比較類推によって外国の事象も内省材料として求める。	
	8.正しい意味での勇気とか正義感の生まれる時期である。	8.大きな社会の中の自己を，そしてその使命を自覚してくる。	
	9.集団的な運動，競技を好み，その機能も著しくのびる。		
	10.男女の性別がはっきるしてくる。女児は男児より心身共に発達が先行する。恥ずかしがりになったり，内向性になったり，ねたみおしゃれなどにもなる。		
	11.一般社会の時事問題にも関心をよせ，よく論じあう。又実地に出向いて研究調査をすることも好む。		

（東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）134－139頁より筆者作成）

【表３　単元表】

	4月　5月		6月　7月　8月			9月　10月		11月　12月	1月　2月　3月
三年	1.始めての自治会 2.勉強の仕方 3.種まき	4.おせっく 5.井頭公園遠足	6.町の乗物 7.成美荘	8.私の家 9.夏の着物 10.水道と井戸 11.夏休中の勉強	12.お手伝 13.田舎のお盆 14.色々な乗物 15.自由研究	16.夏期研究報告展覧会 17.お祭	18.秋の取入れ 19.運動会 20.蟲干し	21.質問箱 22.役に立つ動物 23..電気とガス 24.一年間の日記 25.クリスマス	26.近所のお友達 27.たべもの 28.品物はどうして私達の手に渡るのか 29.かぜひき 30.お餅祭 31.三年社会科について話合
四年	1.自治会 2.池袋町の復興の様子 3.開校記念日		4.田舎と町 5.田無開拓農園 住宅の見学 6.武蔵野鉄道の復線工事 7.夏休みの計画		8.私の一日 9.交際 10.自由研究	11.発表会作品展 12.山の手と下町 13.質問箱から		14.工場見学 15.物の節約と保存 16.私の小遣帳から	17.私たちの町 私たちの東京の生い立ちと仕くみ 18.質問箱から研究発表会 19.一年間の反省
五年	1.勉強の仕方 2.病気と病院 3.遠足高尾山		4.お台所と食物 5.農家の仕事		6.夏休み	7.研究発表会 8.私達の教科書 9.和服と洋服 10.運動会		11.住いの工夫 12.郵便局 13.石炭	14.楽しい生活 15.警察署と区役所 16.発明発見 17.質問箱から
六年	1.学級自治会 2.立派なまとまった組にするには 3.新しい寒法 4.都市と健康 5.社会生活と職業		6.舗市と配給 7.消費組合 8.文字言語は社会生活にどんなに役立っているか 9.自然の恵み		10.水泳会 11.課題研究	12.研究体験発表会 13.東京の発展とその将来 14.鎌倉遠足 15.勤労作業		16.工業はどの様に発展して行くか 17.機械の偉力 18.事故のない安全な生活はどうすれば出来るか 19.私の反省記録から 20.世界の人が仲よくするにはどうすればよいか	21.私の生活理想 22.生活の合理化 23.家庭生活を豊かにするには 24.日本再建には 25.修了式懇談会

（東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）152－167頁より筆者作成）

る。もう１つは，②「一つの大きな問題を学級全体でそれを分担しながら研究する形のもの」で，学年での校外調査研究の重視である。３年の「7.」の成美荘での応用研究，３年の「5.」４年の「4.」５年の「3.」６年の「14.」等にみられる各学級がそれぞれの研究課題に応じて調査を行い，学年の発表会で交流する活動を行っている。最後に，「復興活動」と関連する単元では，３年の「3.」「18.」や６年「14.」のように，成美荘で勤労作業を行っていることが確認できる。

以上から，単元表における単元１つ１つを検討すると，「自由研究」の「研究活動」「自治活動」と「復興活動」との関連が確認できる。これは，先述のように，「作業単元」が『要領Ｉ』の「問題単元」との関係で作成されたため，具体的な単元構成が３活動を重視して行われたことを意味する。

（２）単元構成

単元の展開が示されたものは，「お友達の病気」（１年）「町の乗物」（３年）「鎌倉遠足」（６年）の３つである。このうち，【表４】に含まれるのは，「自由研究」の「研究活動」の②として作成された「鎌倉遠足」（６年）である。そこで，「鎌倉遠足」を事例に，単元構成の特徴を検討してみたい。

「鎌倉遠足」の展開を表したのが【表５】である。この題目は，「一，題材」「二，指導者の立場より見た題材」「三，児童の立場より見た題材」「四，指導方針」「五，指導計画」「六，学習活動と指導の実際」「七，学習効果の測定」から構成されて

【表４　３活動に関わる単元】

	作業単元	時間配当	学習活動の要項	注意事項 ○は文部省（）は作業単元の番号
三年	*1. 初めての自治会*	6	1. 選挙（リーダー）2. 学級内での仕事分担　3. 学校日誌の記録　4. 教室の変化，掃除　5. 遊戯設備の工夫　6. 上級生下級生	①毎週自治会にて継続
	2.勉強の仕方	4	1. 共同学習継続教科の計画（気候，天候，オタマジャクシ，カビコ）　2. 疑問手帳の作製　3. 予習復習の仕方　4. 学級壁新聞　5. 研究発表会	①⑨ (1)(2)(3)と連関
	3.種まき	5	1. 手入法　2. 土，日光水分の作用　3. 色々な肥物（堀地，乾燥地，粘着，塩着，寒着）（一年生草木，茎葉，落葉）4. 植物の種身法　5. 家庭菜園の仕事	④理科と連関
	4. おせっく	5	1. お節句の由来　2. 飾り物，御縁起　3. お節句会の計画　4. 教室の飾りつけ　5. 献官　6. 父兄招待　7. 男らしさ	③①⑤　(30)との関連
	5.共同公園遠足	5	1. 自然文化園にて主に動植物観察　2. 草原の色々　3. 動物の護身法　4. 遠足等の一生の関示　5. 渡鳥の習　6. 各種の動物，水中，地中，樹上，鳥類，寒帯，熱帯）7. 交通順守	④遠足前後の指導必要
	7.成美花	6	1. 農家の研究　2. 農作物　3. 動物の飼育（豚小屋，牛小屋，馬舎，鶏舎，うさぎ，鳥等）　4. 牧場見学（乳しぼり）　5. 交通順守　6. 武蔵野線の研究（地理的位置）沿線の町，名所	④③①
	11.夏休み中の勉強	2	1. 自治的勤度　2. 自学研究の計画　3. 八月要項についての話合	(12)(15)補示指導
	15.自由研究		1. 昆虫採集　2. 植物採集　3. 海の観察	④
	16.夏休み研究報告展覧会	6	1. 八月中の研究発表報告及び製作品の展覧を自治的に計画し実行させる　2. 休中の質問事項を整理し討論させ指導する	八月の総合
	18.秋の取入れ	8	1. 成美花に於て野菜の收穫野菜表　2. 稲の取入作業見学　3. 田植取入御飯になるまでの一生　4. 農機用動物機械　5. 紅葉の研究	⑤
	21.質問箱	4	1. 自由研究中の疑問を質問する（疑問手帳の中より）　2. 討議　3. 分担研究　4. 教師指導	総合
	24.一年間の日記	4	1. 日記中の楽しかったこと　2. 反省事項，話合　3. 一つ年をとるについての覚語　4. 温度天候表整理	継続的仕事の中間指導，反省的時間的考え方
	25. クリスマス		1. 学級小劇会　2. 由来の話合　3. 外国のお祭行事　4. 外国に子供の遊び，学校のこと	⑨　外国に目を広げて
	30. お雛祭	8	1. 学年合同の雛祭の計画をする　2. 準備事務分担（設置，プログラム，ポスター，お家の人招待）3. 雛祭の由来　4. なぞしさ	⑨⑩学年として接触し合う
	31.三年社会科について話合	4	1. 面白かった研究話合発表　2. 質問の色々　3. 三年生としての反省　4. 発表会	①等総合
四年	*1. 自治会*	8	1. 新しい教室の設計と作業活動，奥化　2. 自治委員選挙，班別班編　3. 自治会　4. 組の お約束，学校のきまり　5. 学習計画の話しあい　6. 学級園作業，たまねぎ，手入，観察　7. 家庭生活の計画	⑤⑦⑨
	3.開校記念日	8	1. 学校の生い立ち，沿革　2. 昔の池袋町と昔の学校の様子（写真）　3. 校長，昔の先生方，先輩の方々　問答会　4. 校名説明　5. 現在の様子　6. 愛校心と私たちのつとめ，校歌	①⑤⑨　資料によって歴史的に考察させる。先輩などをよんで話をきく。
	4.田舎と町	12	1. 成美花付近の部落の研究（遺跡巡のあと，古い建物，石器，たてべ，土器，鎧石，黒目川）2. 祖先の定住の仕方，地水，光と熱のとり方，衣食住，部落の出来方 3. 黒目川と久留米村，地形，農，水，林業　4. 野火止水と平林寺　5. 古い家のつくり方と衣食住 6. 昔の人の危険の防止の仕方 7. 都市の発達の仕方，町と生活の利便 8. 田舎と町のつながり	①②③④⑤
	6.武蔵野鉄道と牧歌工場	10	1. 交通路の地理的条件　2. 工事計画と作業　3. 昔の街道についての研究　4. 関所，飛脚　5. トンネル，橋，運河，インクライン　6. 海路について　7. 交通の危険　8. 其の他	④⑥　現地見学　各種の問題をみつけて自由研究，討議，発表会
	7.夏休の計画	3	1. 計画立案	③
	10.自由研究		1. 各自の継続的な自由研究	
	11.発表会作品展	4	1. 自治的鑑賞　2. 学級自治の相談	
	13.質問箱から	5	1. 質問のいろいろ　2. 討議会　3. 分担研究	
	18.質問箱から研究発表会	10	1. 質問のいろいろ　2. 質問の理由　3. 討議　4. 分担研究，研究方法の話し合い　5. 継続研究　6. 研究発表会	総合
	19.一年間の反省	5	1. 各自の反省記録　2. 年中行事の反省，紙芝居につくる　3. おひな祭の行事計画と実施	総合
五年	1. 勉強の仕方	10	1. 五年生になって（自学自習-自治会の改善）　2. 能率のよい勉強 ○予定をたてる勉強（生活予定表の作製）○勉強部屋の設計工夫 ○良書の購入，学級文庫整備　○読書の心構え　○生活日記，疑問日記 ○自由研究の仕方　3. 学級園の計画　4. ラジオの聞き方	①② 工作　理科
	3.遠足高尾山	12	1. 前の研究　イ，分団による研究課題分担○地理班○図書班○歴史班○理科班　ロ，家庭計画の立案と事務分担　ハ，遠足の注意，自治会　2. 実施－都市と農村，八王子，門前町，薬王院，関東平野　3. 報告会並展覧会　○各班の成績報告展覧講評	総合指導，⑥③
	5.農家の仕事	15	1. 成美花附近の農家調べ　○牧場見学（牛乳と乳製品）○蚕真の種類用途，使用法 ○農作物の種類と栽培法 ○農家の経済生活　2. 我が国農業の発達と其の特色　3. 農地問題　4. 主要農産物の生産分布　5. 食料消費と消費者	④⑨森林牧場，実業
	6.夏休み		1. 旅行の計画と実施　2. 農村漁村生活の実態調べ　3. 水休　4. 登山　5. 動植物観察	⑥④②①体育，理科
	7.研究発表会	5	1. 夏休製作品展　2. 研究発表	総合指導
	10. 運動会	8	1. 種目につき説明と話合　2. 学校教育商品調べ　3. 体育用品の種類　4. 運動会の目的につき討議 ○体力増進　○娯楽　○技術　○スポーツマンシップ　5. ポスター　6. 運動会の歌　7. 運動会の作文並反省会	②③図書，音楽，国語
	14. 楽しい生活	10	1. お正月のおあそび　2. 楽しい遊び道具を作る　3. 学級クラブ活動 ○展生会の計画　○学級新聞の発行 ○学級体育会　4. 教室の変化　5. 映画鑑賞　6. 趣味と交際の工夫	⑥
	17.質問箱から	5	総合指導	三月に限らず随時行い度い
六年	*1. 学校自治会*	5	1. 五年の時の学校活動の反省　2. 学級自治会のつとめ　3. 学校の長所短所の検討　4. 学校活動中の分業　5. 最上級生	②① (2)と連関
	2. 立派なまとまった組にするには	5	1. グループ活動（級競飼好クラブ）とリーダー　2. 組の長所短所（五年の学級日誌）　3. 銘々の長所，短所の反省　4. 争いごとの原因　5. 対応組との社会活動（運動，学芸）	①②③
	3. 新しい憲法	6	1. 日本の国際的地位　2. 新憲法の精神　3. 新憲法の相互研究　4. 議会，政府，法律，予算　5. 天皇制について　6. 日本の政治実通史	②
	9.自然の富み	10	1. 水に就いて（水力の重要な源となったものの図示河川の分布と水力発電所図示）　2. 発電方法，電気利用法の調査発表　3. 鉱物資源（鉱山油田の図示鉄産額の変化表）　4. 動植物（漁場図動物分布図 冷水の社所山水害防止法，魚類表説）	④教室学習では完成せぬ。夏休を活用。
	10. 水泳会		1. 水に慣れる　2. 水の科学　3. 泳法競技　4. 夏のスポーツ，オリンピック記録　5. 海の生活	③
	11.疑問研究		自由，各個研究	④ (9)を解決
	12.研究体験発表会	5	1. 自治的計画立案　2. 質疑応答　3. 総合指導	総合取扱
	14.雑書遠足		1. 遠足の計画話し合　2. 研究分担決定予備研究（各学級別個々目標に向って）　3. 歴史的考察年代年表（鎌倉時代前後及息起西起にふれる，西起の鎌倉時代外観）　4. 地理的考察（発達条件，特産物，往復の途次交通）　5. 芸術的考察（絵巻物，スケッチ，文学）	①の他　総合的に
	15.勤労作業	6	1. 作業計画　2. 作業と休憩，衛生　3. 器具操法　4. 作業記　5. 夏休みの中の勤労	成美花にて
	19.私の反省記録から	3	総合的取扱い（座談会型式）	総合
	25.終了式	4	1. 修了式　2. 進学座談会　3. 感謝会＝小学生活の反省	総合

※下実線は「研究活動」①，網掛けは「研究活動」②，斜体は自治活動，その他は「復興活動」を表す。（東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）144－167頁より筆者作成）

【表５　題材「鎌倉遠足」（第六学年）の展開】

一．題材	鎌倉遠足（十月頃の教材）	
二．指導者の立場よりみた題材	従来の単なる年中行事の一つとして実施されて来た，何等児童の学習意欲にもとづかない，そして企画性のない遊び本意の遠足の考え方を捨て，こゝに新しく社会科教育の立場から取上げ，之を真に意義づけ発展させて行きたい。六年生の社会科教育の教育のねらいが，仕事を通して人々が如何に協力しているか，そして国家社会を発展させる母体としての産業生活の理解を目ざしている。指導者の意図は，此の鎌倉遠足を機会として，児童が学級或は学年協同体の一人として，始めから終りまで自分等の遠足としての自覚を持ち責任ある行動をとることを期待している。	
	社会科の指導は児童の心意の発達にそくし，児童の生活環境に根ざさねばならないことは論を俟たないのであって，特に斯うした興味深い臨地指導にあっては，既習のあらゆる学習活動の精華を総合的に取扱い得る便がある。従って斯うした取扱いを効果あらしめるためには，教師の周到な企画と十分な研究が必要となるのである。	
	鎌倉を中心として地理学習としてのねらいを求めていること。鎌倉の地理的立地条件の探究，東京より鎌倉に於ける沿線の地理的考察は本遠足のもつ重要課題であろう。	
	鎌倉に於ける史蹟名所の見学をもとゝして鎌倉時代に於ける政治・文化史の大要を把握させたい。鎌倉時代を全学年に於て学習した明治時代，前単元に触れた江戸時代と対応しつゝ，素朴な武士，農民の生活を基調とした時代的特徴を理解させたい。	
	実践活動にあたっての規律ある行動，乗車の注意，衛生等が考えられる。	
三．児童の立場より見た題材	遠足の目的地の希望調査の結果（児童は単に観念として受取っていた歴史の勉強を実地実物にそくして調べたいという意欲，地理的なもの，理科的なものを調べたいという意欲）から決定。	
四．指導方針	1，児童の学習意欲を基調として立案指導すること。 2，自学自治の態度により企画・実施・反省させること。 3，単なる見物でなく，一題目を定めて深く研究する態度に誘導すること。 4，責任共問の精神を重んじ，統制ある行動をさせること。 5，現実の社会情勢と遊離しないこと。	
五．指導計画（計15時間）	1，遠足計画の話し合い（2時間） 2，研究発表会（2時間） 3，前日の打合会（1時間） 4，当日の指導（1日6時間） 5，報告会（3時間） 6，記録の整理（1時間）	
六．学習活動と指導の実際	1，遠足計画の話し合い	○全員の目的地希望調査を行い多数決により決定する ○六年三学級一緒になり学年協議会を開催して，遠足の目的を討論し，学校の都合を伺い期日を決定する。 ○研究方法について討議し，実施前に十分研究をすること，研究は各組でそれぞれ分担してしっかり調べ，実施前に研究発表会を行うこと，実施後には臨地研究をもとにした報告会を開くことを決定する。
	2，研究分担	一組　○東京より鎌倉までの交通図　○鎌倉の地形図・交通図　○鎌倉時代の政治史 ○鎌倉時代の年表作成　○鎌倉時代の地質・地形 二組　○沿線の町調べ　○鎌倉時代の武士の生活　○鎌倉時代の商業　○観光鎌倉　○相模湾 三組　○三浦半島の地図　○鎌倉の名所旧蹟図　○鎌倉幕府のなりたち　○鎌倉時代の文化　○鎌倉時代の特産物
	3，研究発表会	教師は発表会に先だち，児童の研究の相談相手となり，参考書・指導書の紹介をなしおく。
	4，教師の準備	○実地踏査一駅への交渉，乗車申込，経費，乗物の混雑程度，所要時間，コース調査等。 ○家庭通知一期日，目的，行動の概要，費用，持参品，其の他。 ○事務分掌一会計係，庶務係，児童係。
	5，前日の打合会	○集合場所，時刻の確認　○持参品　○服装　○責任研究場所分担
	6，当日の指導	○東京駅横須賀線プラットホーム集合，団体乗車が許されないので各人家庭の最寄駅より個人切符を購入集合する。丁度通勤時刻に当たるので相応の混雑が予想されるので，通勤者に迷惑を及ぼさぬ様分散乗車をし，自主的な乗物訓練をする。 ○東京駅と丸の内ビル街。帝都の表玄関，官公署諸会社，各線の発着状況を観る。 ○東京より鎌倉までの沿線観察。イ，京浜工業地帯一各種の工場　ロ，東京港　ハ，大森の貝塚　ニ，多摩川と川崎市　ホ，横浜市一貿易港　ヘ，保土ヶ谷，戸塚一近郊農村，住宅地　ト，大船一交通の要地，撮影所　チ，逗子一住宅地，保養，遊覧　リ，亀ヶ谷トンネル一鎌倉周辺の山 ○鎌倉着（午前九時，用便） ○隊列を整え八幡宮へ向って出発。イ，奥しい若宮大路一大鳥居，幕府跡，参宮路の段，巻，桜，松の並木　ロ，八幡宮一建立，祭神，源平地，やぶさめ（九月十六日），銀杏いちょう ○各組毎に研究地域へ分散。 一組のコース：イ，国賓館一町営，鎌倉以降の美術品　ロ，頼朝墓一大蔵山麓，鶴長明の庵　ハ，鎌倉宮一建立，護永親王，土牢，宝物館　ニ，次張山一鎌倉町と周囲の山。昼食，休憩，スケッチ　ホ，滑川一青砥藤綱の逸話　ヘ，高時の墓一東勝寺，鎌倉幕府の滅亡 二組のコース：イ，大仏一起工，落成，供養，大いさ　ロ，長谷観音一縁起　ハ，極楽寺坂一地質地層の露面　ニ，稲村ヶ崎一新田義貞の故事。昼食，休憩，スケッチ　ホ，由比ヶ浜一相模湾の一望，魚，貝，海藻の採集 三組のコース：イ，口福呂坂一切通し，鎌倉攻め　ロ，建長寺一鎌倉五山，建立，国賓建造物，座禅の話　ハ，半僧坊一鎌倉町の展望。昼食，休憩，スケッチ　ニ，政子，実朝の墓 ○鎌倉駅集合（午後三時各組集合，小憩，用便，乗車） ○東京駅着（午後五時半，帰宅までの注意，明日の予定を話し，駅ホームにて解散，成る可く同一方向のものをまとめて帰宅させる）
	7，報告会	予備研究に臨地研究を加え，更に後に研究を補充し，五六年合同の報告会を準備する。各組毎に発表題目を選定し，プログラムを編成する。
	8，記録の整理	「鎌倉学習記録」を作成する
七．学習効果の測定		○計画立案より記録の整理に至る段階に於いて如何に其の児童が積極的に協力したか。 ○学習内容の理解程度。

（東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）186－198頁より筆者作成）

いる。この表を「3.」で述べた「研究活動」の特徴と比較すると，次の特徴が明らかとなる。1つ目は，年中行事の遠足を社会科の立場から，構想していることである。このことについて，東京第二男子附小は次のように述べている[45]

「従来の単なる年中行事の一つとして実施されて来た，何等児童の学習意欲にもとづかない，そして企画性のない遊び本意の遠足の考え方を捨てゝ，こゝに新しく社会科教育の立場から遠足を取上げ，之を真に意義づけ発展させて行きたい。」

2つ目は，児童たちの共同で行う研究活動を重視していることである。これらの特徴は，先述の「自由研究」の「研究活動」の主眼と共通するものである。「六，学習活動と指導の実際」をみると，「1，遠足計画の話し合い」で，学年で集まり，各組の調査事項を決め，「6，当日の指導」では，各組ごとに調査を行っている。さらに，この調査の成果は「7，報告会」で，各組が発表し合うという流れになっている。

このように，「鎌倉遠足」は，「自由研究」の「研究活動」の実践として，社会科学習の発展学習として位置づけられている。のちに東京第二男子附小は，遠足の意義を次のように述べている[46]。

「遠足は社会科，理科等の学習を目的として行う場合もあるが，社会科，理科等の総合学習として行う場合がある。斯かる場合『鎌倉』という大きな単元として実施前より実施後の整理まで各児童が或る題目を選んで研究グループを作ったりしてその成果を発表し合ってより学習を深めて行くという事ができる。」

5．結語

東京第二男子附小は，『要領Ⅰ』に基づく指導法の研究のために教科書局が指定した1947年度の実験学校であった。そのため，先行研究では，東京第二男子附小が作成した社会科単元指導計画を『要領Ⅰ』を具体化したものと評価してきた。しかし，東京第二男子附小は，のちに社会科実践の根底に「文化活動」「自治活動」「復興活動」があったことを指摘する。本稿では，東京第二男子附小によるこの指摘を踏まえ，3活動との関連から社会科単元指導計画の作成過程と単元構成を再考察した。その結果，以下の点が明らかになった。

第一に，終戦直後の東京第二男子附小では，「復興活動」による学校の環境整

備，「文化活動」「自治活動」に力を入れる中で，教科書局による実験学校指定が契機となって社会科の研究を開始したことである。その際，重松や初等教育研究協議会から情報を得ながら進めたが，文部省も試行錯誤の中で社会科の研究を進めていたため，最終的には『要領Ⅰ』の目標と「問題単元」の情報が得られたのみであった。そこで，『要領Ⅰ』の目標と「問題単元」と井坂の指導下で進めた実態調査の成果に加え，それまでに力を入れてきた3活動を踏まえて社会科単元指導計画を作成した。第二に，東京第二男子附小では，学校を整備するために「復興活動」，教科内容を総合的具体的に扱い，実生活の中で児童の教養を向上させるための自主的な研究活動として「文化活動」，児童に自律的な自治的能力を培うことを目指して「自治活動」をそれぞれ第三学年以上で実施したことである。さらに，1947年以降，「復興活動」は勤労中心の内容となり，「文化活動」と「自治活動」は新教科「自由研究」に「研究活動」「クラブ活動」「自治活動」として再編された。第三に，社会科単元指導計画の作成において『要領Ⅰ』の目標と「問題単元」が参考にされたが，具体的な単元は，3活動が基盤となっていたことである。単元表の単元は，『要領Ⅰ』の「問題単元」との関連は重視していたが，多くは3活動を基盤とするものであった。また，「鎌倉遠足」（6年）の展開は，「自由研究」の「研究活動」の考えを踏まえて単元が構成されていた。

以上から，1947年度指定実験学校による社会科単元指導計画作りは，『要領Ⅰ』の目標と「問題単元」を参考にしつつも，それまでの学校の経験に基づいて単元を作成する動きがあったことが確認された。東京第二男子附小の場合は，それが「文化活動」「自治活動」「復興活動」であった。このことは，『要領Ⅰ』の具体化を研究課題とした実験学校でも，1947年9月の社会科実施以前に作成した社会科単元指導計画には，十分な『要領Ⅰ』の情報が盛り込まれていなかったことを意味するのである。

本稿では，「文化活動」「自治活動」「復興活動」との関連から社会科単元指導計画の作成の解明を目指したため，検討対象が中高学年以上となった。今後は，低学年の検討も踏まえて東京第二男子附属小が作成した社会科単元指導計画の単元構成の全体像を解明し，成立期社会科の実施過程の解明に努めたい。

註

（1） 「カリキュラム風土記（北海道・東京・長野・三重の巻）」（『カリキュラム』第８号，1949）48頁。

（2） 東京学芸大学豊島附属小学校『小学校の学習計画と指導』（蓼科書房，1948）９頁。

（3） 拙稿「東京第二師範学校男子部附属小学校における『作業単元』の導入過程―文部省教科書局実験学校による社会科単元指導計画作成の役割―」（日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第21号，2012）１－14頁。

（4） 尾崎斉四郎「あとがき」（『社会科教育』第２号，1947）16頁。

（5） 石川二郎『社会科の教師』（まなびの友社，1947）97頁。

（6） 本橋幸康「昭和20年代前半における東京第二師範学校男子部附属小学校（東京学芸大学附属豊島小学校）の実践」（『国語教育史研究』第２号，2004）14－23頁。

（7） 根津朋実「雑誌『小学生の自由研究』にみる戦後初期『自由研究』の一構想」（日本特別活動学会『日本特別活動学会紀要』第20号，2012）29－38頁。

（8） 成立期社会科の実施過程を検討する必要性については，拙稿「文部省教科書局実験学校における社会科単元指導計画の作成―青木誠四郎の社会科教育論を手がかりに―」（日本社会科教育学会『社会科教育研究』第112号，2011）38頁を参照。

（9） 豊島区立郷土資料館編『豊島の集団学童疎開資料集（7）』（2001）。

（10） 小山昌一先生ご勇退記念の会編『激動の教育―小山昌一・人とその教育―』（表現社，1976）80頁。

（11） 東京学芸大学付（ママ）属豊島小学校『学報　創立五十周年記念誌』（1961）246頁。

（12） 黒澤得男「新教育者の進む道」（『国民教育中学年』第６巻第２号，1946）４頁。

（13） 井坂は，1938年に東京文理科大学を卒業後，東京府豊島師範学校教諭，文部省図書局事務嘱託，文部省図書監修官を経て，1946年２月から教科書局第一編修課に属した。教科書局では，青木誠四郎とともに『国民学校公民教師用書』，『教育心理』をはじめとする多くの手引書の編集に関わった。

（14） 長野師範学校男子部附属国民学校『昭和21年度学校日誌』（1946）。

（15） 1947年度の実験学校では，各教科の学習指導要領に基づく指導法の研究が研究課題とされた。詳細は，拙稿，前掲（註８）39,40頁を参照。

（16） 東京第二師範学校男子部附属小学校「『新しい各科学習指導の研究』編纂計画」（1946）。このメモは，1947年５月に発行した『新しい各科学習指導の研究』（学修会出版）の編纂計画をまとめたものである。「研究事項」「構想の概要」「研究分担と期間，量」から構成され，「研究事項」の中に，「本校教育の構想」が明記されている。「研究分担と期間，量」の中に，「期間十一月中完了」と書かれていることから，1946年11月以前に書かれたものと推測される。なお，筆者は，このメモをご子息の小山實氏からご寄贈頂いた。ここに記して謝意を表したい。

（17） 東京第二師範学校男子部附属小学校『新しい各科学習指導の研究』（学修館出版部，1947）２頁。

（18） 東京第二師範男子部附属小学校「社会科の学習指導計画案」（『社会科教育』第２号，

1947）17頁。

(19) 小山昌一「激動の昭和史とともに」（小山昌一先生ご勇退記念の会編，前掲（註10）81頁。）

(20) 会議には，『要領Ⅰ』編纂者の重松・塩田・尾崎・上田，東京第二男子附小の黒澤，白金小の大石らが参加している。会議では，「Ⅰ．社会科の導入のための準備」「Ⅱ．学校カリキュラムにおける他の教科と社会科をどのように関連させるべきか」「Ⅲ．小学校において目下の社会問題の取り扱いをどうするか」「Ⅳ．社会科カリキュラムにおいて宗教訓練とどのように関連させるか」「Ⅴ．社会科の成果をどのように評価できるか」が議論された。（GHQ/CIE, Report of Conference, 19 March 1947, CIE(C)00334.）

(21) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）２，３頁。

(22) 初等教育研究協議会の研究動向については，拙稿，前掲（註３）５頁を参照。

(23) 黒沢得男「日本教育の支柱たれ」東京学芸大学付属豊島小学校，前掲（註11）127頁。

(24) 東京学芸大学豊島附属小学校，前掲（註２）9頁。

(25) 両角達爾「社会科実践感想」（『新教育研究』第６号，1947）12頁。

(26) 東京第二師範男子部附属小学校，前掲（註18）17頁。

(27) 伊藤一郎「附属小学校の研究部長のころ」（小山昌一先生ご勇退記念の会編，前掲（註10）110頁。

(28) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）414頁。

(29) 豊島師範学校附属小学校の「文化活動」は，昭和７年の新教育改革で実施された。成田千里主事の指導下で新任の重松鷹泰を中心に進められ，『わが校の新教育』（1932）に成果をまとめている。

(30) 各部の活動概要は，次の通りである。理工（理科・算数・工作・気象天文，動物の飼育，植物の栽培採集），文芸（読書指導，詩・歌・句・脚本等の鑑賞及び創作指導），書道（日常生活における文書通信等の指導），郷土（学校を中心とする生活環境調査，郷土の地理的・国史的なものの再吟味，科学的研究態度の育成），音楽（唱歌・器楽・鑑賞の指導），童劇（紙芝居・幻燈の筋書・実物の作成），図画（児童製作品の鑑賞・展覧，共同作品の製作），手芸（基本的な裁縫技術の習得，作品製作，鑑賞）運動（様々なスポーツの理解，スポーツマンシップの育成），園芸（近くの園芸場で，低学年は草花，高学年は野菜の園芸），英語（絵画・動作・事物等から直感的に，口から耳への学習により言葉への関心を深める）。（市川誠「国民学校教育の一動向」（『婦人と政治』第２号，1946）25,26頁，東京第二師範学校男子部附属小学校『社会科と自由研究の指導を試みて』（第一出版社，1947）151－196頁。）

(31) 文化活動発表会のプログラムは，以下の通りである。

1946年12月6日			1947年3月17日		
1 開会のことば	高二 久保庭健吉		1 開会のことば	高二 久保庭健吉	
2 歌唱指導（文化活動の歌）	初五，六女		2 よびかけ（自由の窓）	初六 文芸部有志	（文芸）
3 朗読 A詩（すずめの学校のかえり道）	初四女 岡川俊子	（文芸）	3 斉唱（自由研究の歌）	全員	
B文（お米とり）	初四男 畠山 裏	（文芸）	4 作品朗読 A劇脚本（えんぴつの兄弟）	初四 三井良枝	（文芸）
4 斉唱 A野菊 Bおもちつき	初三男 全員		B創作童話（ストーブクロチャン）	初五 木村 泉	（文芸）
5 研究発表（紅葉の研究）	初六男女 吉浦・杉本・矢部・高崎	（理工）	5 研究発表（交通事故調査）	初六 森規矩夫	（郷土）
6 朗読 A文（ひよこ）	初三女 川浪裕子	（文芸）	6 ピアノ連弾（ハンガリー舞曲五番）	初六 松川美子，井上和子	（音楽）
B文（碑園の思い出の中より）	初五男 木村 泉	（文芸）	7 研究発表（冬の芽の観察）	初三 御田 哲	（理工）
7 合唱 A秋の歌 B冬景色	初五，六女	（音楽）	8 かげえ芝居	初一 有志	（総合研究）
8 研究発表（スピード調査）	初六男 赫規矩夫	（郷土）	9 アコーディオン独奏	初六 真野泰治	
9 朗読 A詩（おもちゃの世界，影法師）	初五女 堀 文子	（文芸）	10 研究発表（大根の栽培について）	高一 下村 博，小松博孝	（園芸）
B文（学校のゆきかえり）	初六男 池田隆彦	（文芸）	11 唱歌指導（わたしは豊島の銀杏の木）	田中先生と音楽部員	（音楽）
10 研究発表（太陽熱と色）	初六男 木村百宏	（理工）	12 作品朗読 A童詩四篇	初五 堀 文子	（文芸）
11 人形劇（大きなかぶ）	童劇部 全員		13 B創作童話と童詩二篇	初六 森田郁代	（文芸）
12 講評（研究部として）	市川誠先生	（音楽）	14 研究発表（吐く息の色の研究）	初六 松田 弘	（理工）
13 講評（全校として）	主事先生	（童劇）	15 三部合唱（冬景色，シューベルトの子守歌）	初五 有志	（音楽）
14 閉会のことば	初六女 関野明子		16 童話劇（杜子春）	童劇部全員	（童劇）
	司会者 高一 加藤敏夫，下村 博		17 講評	市川誠先生	
			18 閉会のことば	初六 森田郁代	
				司会者 初六 林 正治，南 整	

（東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）421頁，同著，前掲（註30）146，147頁。）

(32) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）403頁。

(33) 東京学芸大学豊島附属小学校，前掲（註２）27頁。

(34) 東京第二師範学校男子部附属小学校「自由研究の指導の実際とそのあり方」（『教材研究』第２巻第５号，1947）32頁。

(35) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註34）33頁。

(36) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註30）198頁。

(37) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）422頁。

(38) 井坂行男・両角達爾・小山昌一編『新社会への子供―「社会」科教育の研究―』（牧書店，1947）103頁。

(39) 文部省『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（1947）１頁。

(40) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註18）16頁。

(41) 小山教官が残したメモ（『実態調査案』）には，「勤労調査」「読物調査」「児童の発達調査」「遊びの調査」「知能調査」「自治会調査」「情意発達段階調査」「児童の人間像」が調査項目として記録されている。なお，筆者は，このメモを前掲（註16）のメモとともにご子息の小山實氏からご寄贈頂いた。ここに記して謝意を表したい。

(42) 井坂行男「社会科教育にそなえて―公民教育の方法」（『教育社会』第２巻第３号，1947）18頁。

(43) 井坂行男・両角達爾・小山昌一編，前掲（註38）13頁。

(44) ４つの単元のもととなったと考えられる『要領Ⅰ』の「問題単元」は，「いろいろな物を手に入れるには私達はどうすればよいか」（３年）「どうすれば私たちは安全な生活ができるか」（６年）「工場生産はどこに，どの様に発達してきたか」（６年）「世界中の人々が仲よくするにはどうすればよいか」（６年）（文部省，前掲（註39）60－62，122－124，129－132，135－137頁。）

(45) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註17）186頁。

(46) 東京第二師範学校男子部附属小学校，前掲（註30）107頁。

The Role of "Cultural Activities," "Autonomous Activities," and "Rehabilitation Activities" in Developing and Implementing Social Studies Units at an Affiliated Elementary School of the Tokyo Second Normal School for Men: The Implementation Process of Social Studies in Experimental Schools in 1947 designated by the Textbook Bureau of the Ministry of Education

Masanori SHINOZAKI

The objective of this study is to analyze the role of "cultural activities," "autonomous activities," and "rehabilitation activities" in developing and implementing Social Studies Units at an Affiliated Elementary School of the Tokyo Second Normal School for Men, in order to clarify the specifics of developing and implementing Social Studies Units in Experimental Schools in 1947 designated by the Textbook Bureau of the Ministry of Education. To achieve this, I first analyze the movement of this School from (?) 1945 to May of 1947. Then I examine the School's "cultural activities," "autonomous activities," and "rehabilitation activities." Third, I analyze the relationship between the three activities and curriculum structure and unit organization in Social Studies Units.

The findings of the study are as follows. First, during the early postwar period, while this School was focusing its efforts on improving the school environment through "cultural activities," "autonomous activities," and "rehabilitation activities" the establishment of Experimental Schools, designated by the Textbook Bureau of the Ministry of Education, lead to the implementation of the Course of Study for Social Studies I (Tentative, 1947), and provided an opportunity to begin research into social studies. Second, "cultural activities" aimed to develop independent research activities and enhanced children's education by treating the curriculum in comprehensive and concrete terms and applying teachings to daily life. "Autonomous activities" aimed to cultivate a capability for autonomy. From 1947, the content of "rehabilitation activities" became focused on labor, whereas "cultural activities" and "autonomous activities" were reorganized as "research activities" and "autonomous activities" respectively within a new subject "free study." Third, the objectives outlined and "problem units" in Social Studies I were referenced during the process of developing the social studies units, while

specific units were related to the three activities described above.

It is understood from the above that in the Experimental Schools, while references were made to the objectives outlined and "problem units" in Social Studies I when establishing the curriculum, there were movements to create social studies units for specific teaching units based on past school experience. These were "cultural activities," "autonomous activities," and "rehabilitation activities." This indicates that the information contained in Social Studies I was not fully incorporated into the social studies units developed before the implementation of social studies in September 1947 by the Experimental Schools.